

熱田ブランド推進プロジェクト “あつた人（びと）” になろう！

「熱田区誕生 ～熱田湊から名古屋港へ～」

多くの歴史文化資産を有する熱田区。以前実施したアンケート調査で、全国に誇るべき熱田の資産は？という質問を行ったところ、第1位は、1900年の歴史を有する熱田神宮、そして第2位は、七里の渡し跡（宮の渡し、熱田湊）という結果になりました。



七里の渡し跡（宮の渡し公園）

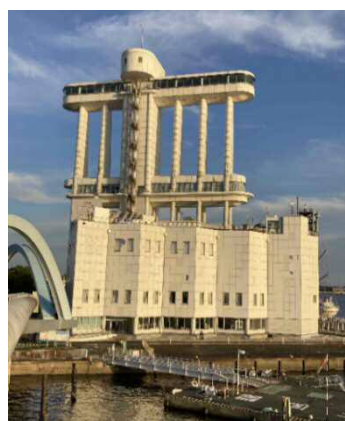


時の鐘と常夜灯

交流交易の要衝として古くから栄えた熱田湊（港）ですが、明治後期に入り、その座を現在の名古屋港へ譲り渡すこととなります。これが起因となって、旧熱田町と名古屋市との合併が行われました。



名古屋港



ポートビル

さて、「熱田ブランド」の目的は、①区民の皆様の誇りや郷土愛の醸成、②熱田のまちが憧れを持って注目されるまちになること、そして、③名古屋市全体に波及して、名古屋市に良い影響をもたらすこと（熱田発！で、名古屋を元気に！！）です。

そのため、その対象エリアは、熱田神宮や宮の渡しを中心に熱田区内にとどまらず周辺地域にまで及びます。（熱田の取り組みの良さが区域外にしみ出していくような、そんなイメージです。）

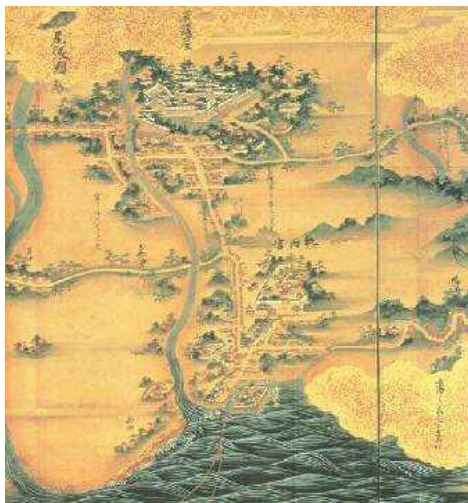
今回は、熱田湊から名古屋港に至る歴史的経緯を中心に、熱田がこの地域の発展に果たした役割や熱田のまちの変遷、当時のあつた人（びと）の“熱い思い”を取り上げたいと思います。

「～宮宿」

熱田台地の先端に位置する熱田の地には、古の時代から人が住み、集落がつくられ、縄文から弥生時代の遺跡や古墳も多くあります。古代から熱田社の門前宮まち、中世から近世にかけては、鎌倉街道沿いにあつて伊勢湾につながる湊（港）まちとして、この地域の中心として栄えました。

江戸時代、清州越しにより名古屋の城下町が形成されます。＜当時の熱田の人々は、堀川の開削や名古屋城築城の様子を見ていたのではないのでしょうか？ 熱田は、名古屋の‘母都市’と言えると思います。＞ 尾張藩は、熱田奉行、熱田船奉行、白鳥に材木奉行をおいて、熱田の地を統治していました。

お城や武家屋敷を中心に形成された名古屋の城下町と、経済の一大中心地であり町人としての誇りが保たれた熱田は、堀川と本町通で結ばれていました。そして東海道41番目で最大の宿場町、宮宿となり、桑名との間に東海道唯一の海路である「七里の渡し」も開かれ、東海道、美濃街道、佐屋街道をつなぐ要衝としてますます繁栄しました。



江戸時代の絵地図に描かれた名古屋と熱田

＜大日本五道中図屏風＞

（熱田区誌・三井記念美術館）



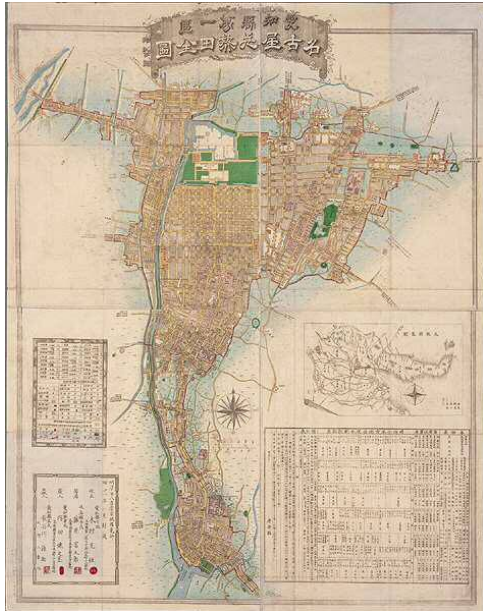
尾張名所図会「七里渡船着 寝覚里」

（名古屋都市センター）

「～旧熱田村、旧熱田町時代」

明治2（1869）年、尾張藩は名古屋藩と改称され、明治4（1871）年、廃藩置県により名古屋藩に替わって名古屋県が設立され、翌明治5（1872）年、尾張と三河を所管する愛知県と改称されました。

愛知県は6つの大区に分けられ、熱田は名古屋と合わせて第1大区となりました。



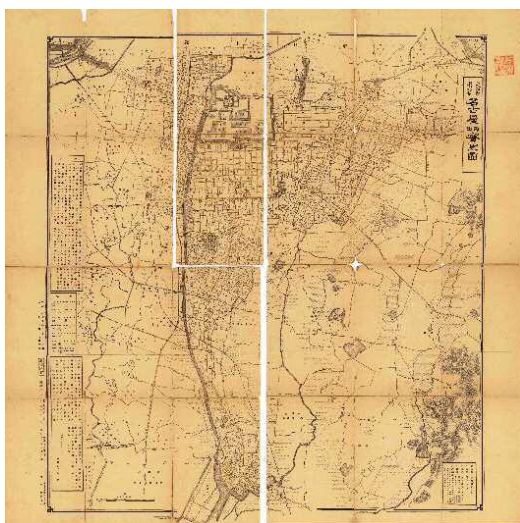
明治10（1877）年の地図

＜愛知県第一（大）区 名古屋及び熱田全図＞

（市政資料館）

明治11（1878）年、郡区町村編成法の施行により、名古屋は名古屋区となり、熱田は旧熱田村として愛知郡の中心となり、ここでいったん名古屋と離れることとなりました。

明治22（1889）年には、市制町村制の施行により、名古屋市が誕生し、熱田は旧熱田町となりました。



明治27年（1894）の地図

＜名古屋（市）、熱田（町）実測図＞

（鶴舞中央図書館）

「名古屋市との合併」

明治30年代後半（1900年頃）になり、名古屋市と旧熱田町との合併問題が台頭しました。産業の集積や貿易の進展に伴い港の役割が重要性を増す一方で、江戸時代から続く埋立てにより内陸部に位置する熱田湊（港）は、水深が浅く大型船の接岸が困難だったため港湾機能を十分に発揮することができなくなっていました。そこで、愛知県が進めていた築港事業（現在の名古屋港）に絡んで、名古屋市と旧熱田町との合併問題が起こったのです。



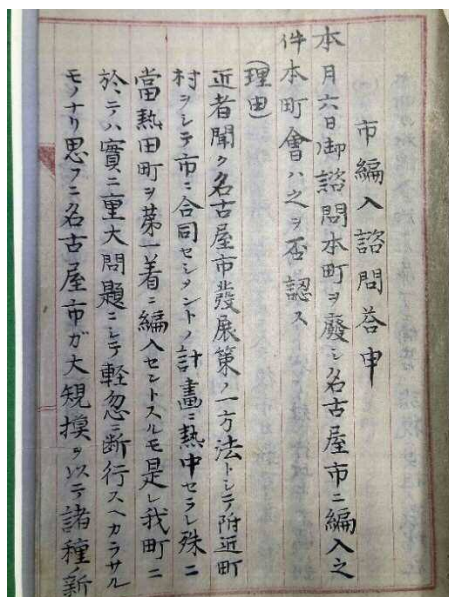
明治中～後期の熱田湊（港）

（写真に見る明治の名古屋）



新田開発略図（埋立て）

この時、旧熱田町側では『1800年余という古い歴史を持つ熱田が、わずか300年余の歴史しか持たない名古屋に編入されることは甚だ納得できない。むしろ名古屋こそ熱田に編入されるべきである・・・。』という反対論が喧しかったと伝えられています。



明治40年（1907）2月の旧熱田町議会議事録

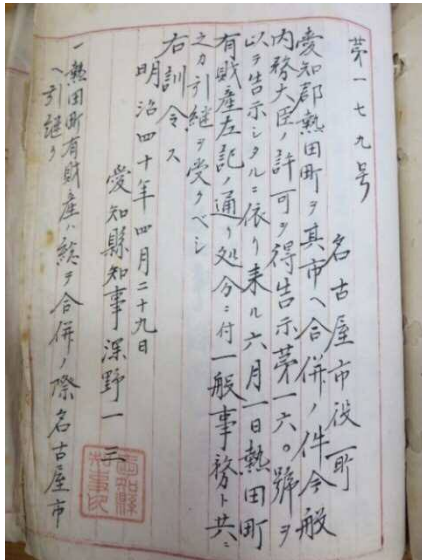
＜熱田町を廃し名古屋市に編入の件 諮問答申＞

（市政資料館）

旧熱田町議会は、名古屋市との合併に対し全会一致で反対を決議しましたが、時代の趨勢の中で最終的には合併を認めざるを得ないこととなり、明治40（1907）年6月、熱田は名古屋市に編入されました。明治維新当初名古屋に加わり、明治11年に分離して以来、29年ぶりのことでした。

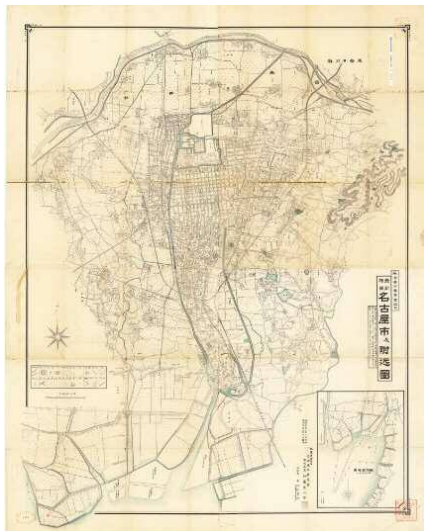
熱田町の編入によって、名古屋市は名実ともに臨海部を有する大都市となりました。長い歴史を有する熱田湊（港）は、名古屋港と改称され、さらに南部臨海部や埋立地も名古屋市に編入されました。

「名古屋南部史」（昭和27（1952）年刊行）



明治40（1907）年4月の訓令

<熱田町合併に伴う事務及び財産引継の件>
(市政資料館)



明治40（1907）年の地図

<名古屋市及び附近図>
(鶴舞中央図書館)



明治末の名古屋港

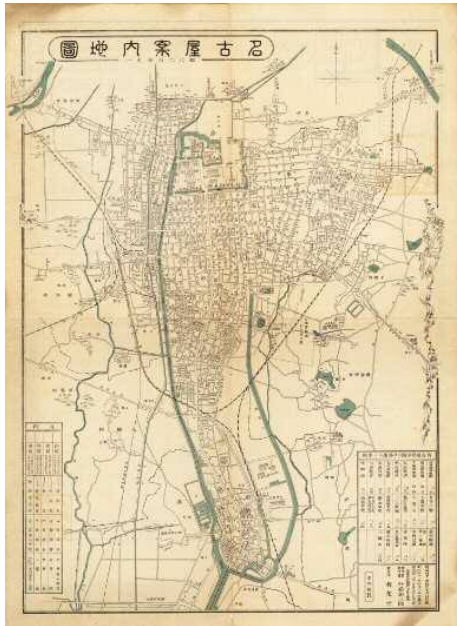
(写真に見る明治の名古屋)

「熱田区誕生」

熱田が名古屋市に編入された翌明治41（1908）年、市域の拡大によって、区制（4区）が敷かれることとなり、＜東・中・西・南＞の4つの区役所が設置されました。

熱田の町は、南区という区名を冠することとなり、“熱田”という名前が消えてしまうこととなりました。

そこで熱田の人々は、伝統ある“熱田”の名を存続させたいと、‘熱田白鳥’、‘熱田伝馬’、‘熱田大瀬子’というように、当時18あった全ての町名に、“熱田”の文字を冠として付けました。



明治41（1908）年の地図

＜名古屋（市）案内地図（4区制）＞
（鶴舞中央図書館）

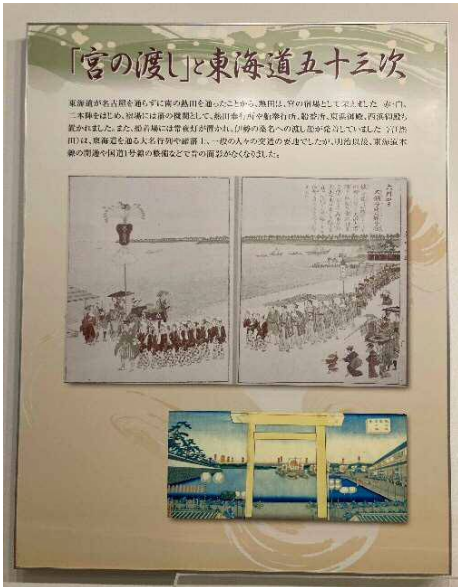
※熱田エリアは南区となっています

当時のことを知る貴重な資料である「熱田町旧記（大正2（1913）年刊行）」の序文には、『我が熱田は今や名古屋市の一區（区）となりたるも、その起源を訪ぬれば遠く二千有余年の前に在りて、国史と密接なる関係を有し……。～……。本書を刊行する所以なり。』と書かれ、熱田に関する記録を残す中で愛する熱田を何とかしたいという強い思いが表れています。

その後も、明治末から大正、昭和初期と周辺町村との合併を続けた名古屋市ですが、さらなる市域の拡大の中、熱田をはじめ南部地域を中心に、増（分）区に関する多数の陳情が相次ぐこととなりました。

その結果、昭和12（1937）年10月、10区制が施行されることとなり、現在の熱田区が誕生しました。

『區（区）は昔の土地の名により即ち熱田區と称す。』とされ、明治40年の名古屋市編入依頼、30年ぶりに“熱田”の名前が復活しました。



熱田は、この地域の発展に大きな役割を果たし、名古屋の発展の原動力となってきました。それは、「熱田の地」の利とともに、誇りや郷土愛、強い志を持った“あつた人”の営みがあったからに他ならないと思います。

あつた人の“熱い思い”は今も引き継がれ、地域や団体、学校、企業、行政等による新しい取り組みへとつながっています。

参考（外部リンク） 熱田ブランド+（プラス）

<https://www.ngu.jp/atsuta-brand-plus/>